

論文

大学体育における学生のニーズに関する研究 —英語による CLIL 導入の可能性に着目して—

Research on the Need of Students in Physical Education Classes of University:
Focusing on the Possibility of the Application of CLIL in English

常行 泰子 (高知大学教育学部)¹

長谷川 雅世 (高知大学教育学部)¹

TSUNEYUKI Yasuko¹ and HASEGAWA Masayo¹

1 Faculty of Education, Kochi University

ABSTRACT

The study was conducted due to the increased globalization of the university. Training university students as globalizing human resources for future through CLIL is a key strategy. The purpose of this study was to identify the need of students in physical education classes of university focusing on the possibility of the application of CLIL in English.

A survey was conducted using a questionnaire. The data was collected from a sample of 362 students studying general education subjects at Kochi University from December in 2014 to January in 2015. The main findings were as follows: 1) positive opinion was shown in approximately half of the students in practical classes, while the rate in lecture classes was approximately 30%, 2) students who think that physical education classes in English contribute to their future were about 20% in practical classes, and more than 30% of students in lecture classes also thought this, 3) some students made mention that they cared about the teachers in charge, the teaching materials, and the level of the classes. It is thought that good ideas particular to CLIL are necessary for making syllabi and the preparation of teaching materials.

The need for physical education classes in English was shown in a number of this school's students. Some students expected that the practical classes would contribute to their future after graduation in addition to the improvement of their linguistic ability. Physical education classes contribute not only to health education and practice among the students, but also the likelihood that the utility of which will function to increase as the motivation in English learning.

I. はじめに

大学審議会による「グローバル化時代の高等教育の在り方について」の答申（文部科学省, 2000）を皮切りにスタートした大学教育の国際化は、高等教育機関におけるグローバル人材や留学生に関する各種施策へと発展している。様々な意見が相次ぐ中、スーパーグローバル大学創成支援事業は推進され、英語で授業を実施する大学学部・学科の新設等、語学力向上や文化の理解促進を含めた学生教育が新たな局面を迎えている。グローバル化を見据えたカリキュラム導入は大学体育にも影響を及ぼしており、公益社団法人全国大学体育連合が実施した調査では、既に保健体育の講義・演習・実技で英語を用いた授業が展開され、将来英語で体育授業を開講する予定がある大学も一定の割合で存在している（小林ら, 2014）。今後は、専門家が議論するのみならず、学生のニーズを分析し、各大学の実情に応じた授業内容や一般化できる具体的なカリキュラムを再検討する段階に入ったといえよう。

この潮流において、近年では英語習得を教科内容と併せて行う内容言語統合型学習（CLIL）が一層注目されている。ヨーロッパで提唱され、現在も広く浸透する CLIL は、非母語で教科を学習し、①内容（Content）、②言語

（Communication）、③思考活動（Cognition）、④文化・国際理解/協同学習（Culture/Community）からなる「4つのC」で語学力や教科知識、思考力、コミュニケーション力を統合して育成する目的で、科目教育と語学教育の双方の習得を目指す（池田・逸見, 2014）。小学校における外国語活動の学習指導要領の実践においても有効である旨が指摘されている（CLIL Japan Primary, 2017; 中西, 2011）。CLIL は、学習（learning）と使用（using）の相互作用により相乗効果が期待できることから、大学の体育授業においても、語学力向上に貢献し得る可能性がある。英語を用いた大学体育については、二五・伊藤（2017）によるサッカーの授業が報告されており、英語によるシナリオを活用して、生徒の興味関心を高める結果が報告された。しかしながら、今後の発展が見込まれる一方で、学生のニーズは明らかにされておらず、調査研究や実践的研究に関する知見は現段階で十分とは言えない。

よって、本研究では、英語で実施される大学体育の授業における学生のニーズに着目した。学生の受講希望の有無やその理由を明らかにすることは、学術的かつ社会的貢献において意義が高いと考えられる。本研究の目的は、英語による大学体育の授業に着目し、学生の受講に関するニーズを明らかにすることである。

II. 研究方法

1. 調査対象

調査対象者の選定においては、高知大学に所属する学生

で有意抽出法を用いた。運動・スポーツに関する講義授業である共通教育科目「スポーツ科学講義 A」と「スポーツ科学概論」を履修する学生 362 名を本研究の対象とした。

2. 調査方法

2014 年 12 月から 2015 年 1 月にかけて、高知大学共通教育棟において集合法による自記入式の質問紙調査を実施した。調査対象者に対して調査の内容及び倫理規定に関する説明をした後、調査票を配布し、その場で回収した。有効回収数は 362 票（男子 220 票、女子 142 票）で、回収率は 100%であった。

3. 調査内容

本研究では、個人的属性、有能感、ニーズに関連する 15 項目の調査票を作成した。個人的属性については、性別・年齢・所属学部/大学院・課外活動・進路希望・英語に関する資格を設定した。有能感は、運動・スポーツと英語に対する有能感を尋ねた。小林ら（2014）は、大学の研究者を対象に講義・演習・実技に分類した上で授業開講の有無を明らかにしたが、実技と講義からなる質問文の方が学生の回答は得られやすいと判断した。よって本研究では、英語で実施する体育の実技と講義に関する受講希望と種目及び理由について尋ねた。自由記述は、英語で行う体育授業について、聞きたいことや意見・要望等を設定した。

III. 結果

1. 調査対象者の属性

調査対象者の性別については、男子が 220 名（60.8%）、女子が 142 名（39.2%）であり、女子よりも男子が多く回答した。平均年齢は、 19.5 ± 2.3 歳であり、最低年齢は 18 歳、最高年齢は 57 歳であった。所属は、理学部 130 名、農学部 100 名、人文学部 74 名、教育学部 52 名、医学部 1 名、その他 4 名、大学院は 0 名であった（表 1）。

表 1 所属学部/大学院

	n	%
教育学部(保健体育・スポーツ科学コース)	17	4.7
教育学部(英語コース)	2	0.6
教育学部(教育科学コース:体育)	1	0.3
教育学部(教育科学コース:英語)	32	8.9
人文学部(人間文化学科)	21	5.8
人文学部(国際コミュニケーション学科)	22	6.1
人文学部(社会経済学科)	31	8.6
理学部	130	36.0
農学部	100	27.7
医学部	1	0.3
その他	4	1.1

課外活動の実施状況については、68.8%の学生が活動しており、活動していないのは 31.2%であった。体育会に所属しているのは 21.5%、スポーツ系サークル・同好会

28.7%、文科系サークル・同好会 18.5%であった (表 2)。

表 2 課外活動の実施状況

	n	%
体育会	78	21.5
スポーツ系サークル・同好会	104	28.7
文科系サークル・同好会	67	18.5
活動していない	113	31.2

英語に関する資格 (複数回答可) は、資格ありが 48.1%、資格なしが 51.9%であった。資格は、英検が 40.3%と最も多く、英検+TOEIC5.2%、TOEIC1.7%、TOEIC+TOEFL0.6%、TOEFL0.3%と続いた (表 3)。

表 3 英語に関する資格 (複数回答可)

	n	%
英検	146	40.3
TOEIC	6	1.7
TOEFL	1	0.3
資格なし	188	51.9
英検+TOEIC	19	5.2
TOEIC+TOEFL	2	0.6

進路希望 (複数回答可) については、公務員が 30.4%と最も多く、次いで教員 28.5%、民間企業 27.9%、未定 18.2%であった (図 1)。留学 (3.9%)、外資系企業 (5.5%) といった直接的に英語を多用する進路希望は、上記と比較して低い割合が示された。

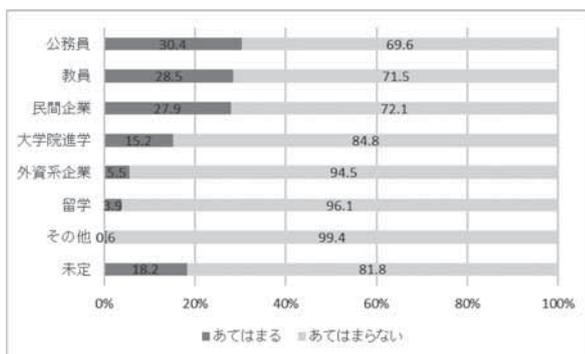


図 1 進路希望 (複数回答可)

2. 運動・スポーツと英語に関する有能感

運動・スポーツと英語に関する有能感について、図 2 に示した。運動・スポーツについては、「非常に得意である」(11.7%)、「少し得意である」(47.2%)を合わせて 58.9%の学生が有能感を抱いていることが明らかになった。一方、英語についての有能感は、「非常に得意である」(2.0%)、「少し得意である」(19.3%)と 21.3%の学生が有能感を

持ち、運動・スポーツよりも低い値が示された。

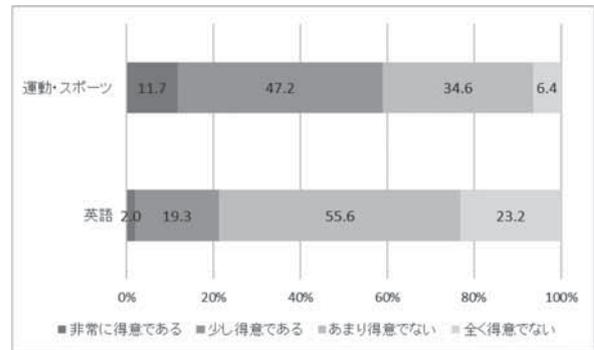


図 2 運動・スポーツと英語に関する有能感

3. 英語で実施する体育実技のニーズ

英語で実施する体育実技に関するニーズを図 3 に示した。「受講したい」(11.3%)、「どちらかと言えば受講したい」(37.8%)を合わせて 49.1%の学生が体育の実技授業を希望している結果が示された。

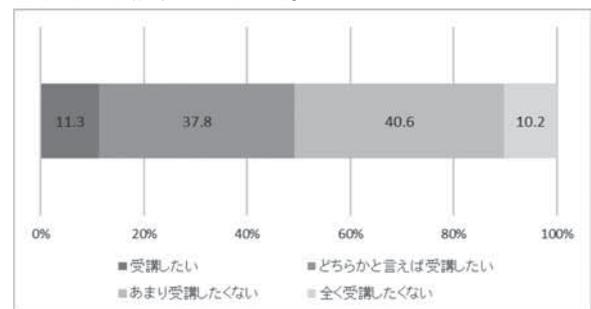


図 3 英語で実施する体育実技のニーズ

英語で実施する体育実技の受講理由 (複数回答可) について図 4 に示した。「英語力を磨きたい」が 61.8%と最も多く、「体育が好き」(53.4%)、「英語が好き」(21.9%)、「将来の進路に役立つ」(20.2%)と続いた。

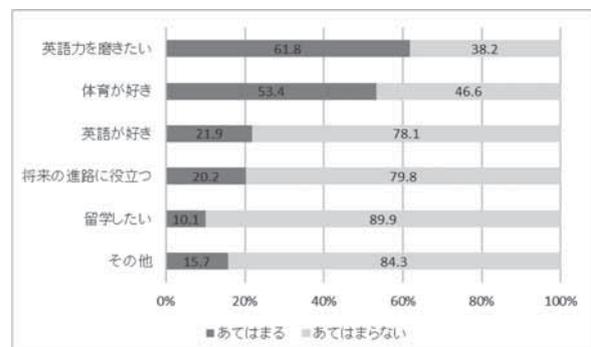


図 4 実技での受講を希望する理由 (複数回答可)

現在、高知大学で開講されている実技種目での受講を希望する種目 (複数回答可) について図 5 に示した。最も多かった希望種目としてサッカー (49.2%) が挙げられ、次

いで、バドミントン(44.7%)、バスケットボール(39.7%)、テニス(36.9%)、フィットネス(34.1%)が続いた。

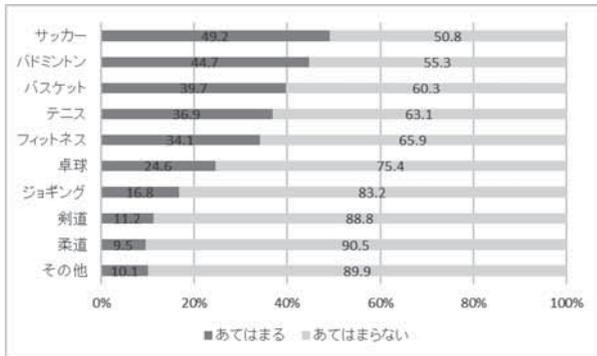


図5 実技での受講を希望する種目

英語で実施する体育実技を希望しない理由を図6に示した。「英語が苦手」とする学生が62.0%と最も多く、「日本語で受講したい」(37.5%)、「英語の授業ではないのに英語を使うのはやめてほしい」(28.3%)と続いた。

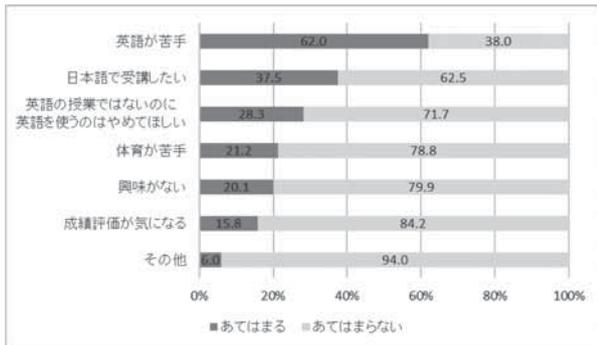


図6 実技での受講を希望しない理由

4. 英語で実施する体育講義のニーズ

英語で実施する体育講義のニーズについて図7に示した。「受講したい」(6.9%)、「どちらかと言えば受講したい」(23.5%)を合わせて30.4%の学生が受講を希望していた。一方、「あまり受講したくない」(48.9%)、「全く受講したくない」(20.4%)は69.3%であった。

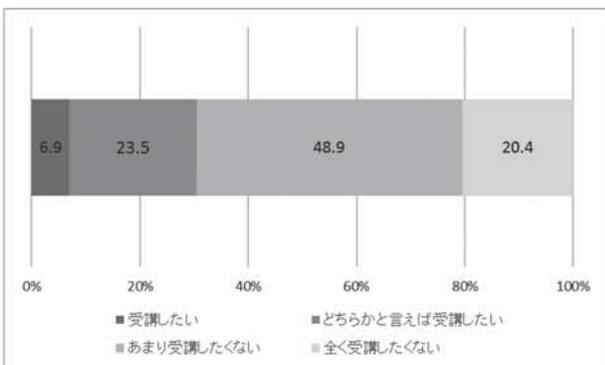


図7 英語で実施する体育講義のニーズ

英語で実施する体育講義の最も多かった受講理由としては、「英語力を磨きたいから」が66.4%であった(図8)。図5で示した実技に対する受講希望と比較すると4.6ポイント上回った。「体育が好きだから」(43.6%)、「将来の進路に役立つから」(32.7%)、「英語が好きだから」(24.5%)と続いた。将来の進路に関する期待は、実技よりも講義における受講理由として12.5ポイント高い結果が示されている。

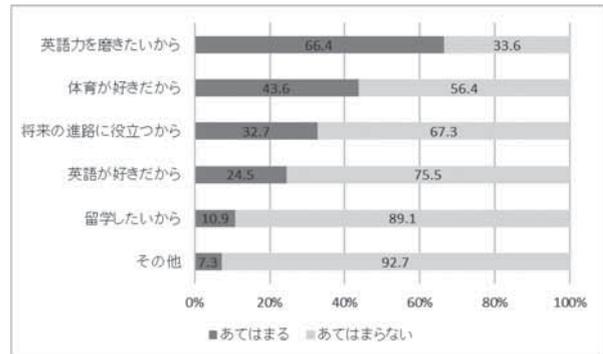


図8 講義の受講を希望する理由

講義の受講を希望しない理由を図9に示した。「英語が苦手」と回答した学生は57.8%であり、「日本語で受講したい」(40.2%)、「英語の授業ではないのに英語を使うのはやめてほしい」(26.3%)と続いた。「成績評価が気になる」は、実技と比較して4.9ポイント高く示された。

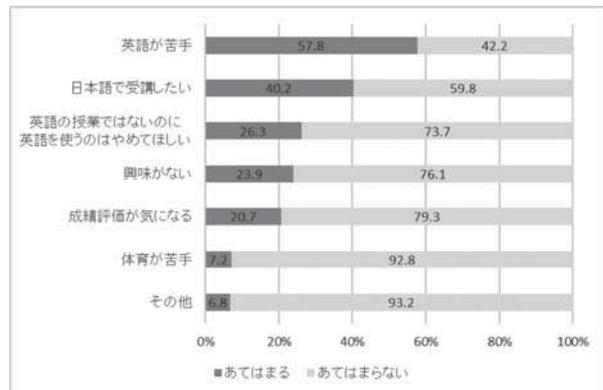


図9 講義での受講を希望しない理由

5. 主要な自由記述

英語で行う体育の授業について、聞きたいことや意見・要望について尋ねた。(筆者により一部修正)

「質問」

- ・講師は外国人の方がやったりしますか？
- ・どれくらい英語力が必要なのか。
- ・説明を全て英語で行うのであれば、安全対策などが正確に生徒に伝わらず危ないと思うのですが、そのあたりの対策はされるのですか？

「肯定的意見」

- ・ネイティブな方々とふれあえる授業を期待しています。
- ・面白そうです。
- ・チームで行うスポーツであれば、英語でコミュニケーションをとるツールとしてより身近に感じられると思う。
- ・せっかく英語でやるなら実技の方が楽しいかなあと思いましたが、大学ですから多少難しくても講義もいいかもしれませんね！ただ、成績評価は気になります。
- ・コミュニケーションを行う場所にしてほしい。
- ・英語で行う体育の授業は、英語が体にしみつくので良いと思う。
- ・必修の英語の代わりにするのなら受けたい。
- ・本当に実施するのならとても興味あります。
- ・実技などは英語で行うととても楽しいし、ジェスチャーなどの力もつくと思うのでいいと思います。

「否定的意見」

- ・英語で行う体育の実技授業は少しおもしろそうではあるが、やはり日本語で受講したいし、英語は英語の授業だけで充分であると私は考える。
- ・英語も運動もできないので、自分はやりたくないです
- ・日本語でやってください。
- ・海外の人が日本にない技術で授業をするなら魅力的だが、あえて英語でする必要がないと思う。
- ・専門的な用語をあまり使わないでほしい。
- ・やる意味が分かりません。

「その他意見」

- ・必要以上にクラス分けが必要になるのではないかと思います。
- ・聞き取りが苦手な人は、競技の説明の時分からないところが出てくるのではないかと思います。
- ・実技ならノリで自然と覚えることができそうだが、座学となると英語をやっている感が強く出そう。
- ・ケガをする恐れのあるようなことについては、正確に伝えるために日本語を使う必要があるため、ネイティブがする場合、彼・彼女らに日本語力が求められるのではと考えた。
- ・聞き取れないときのために日本語で書かれたプリントがあってほしい。
- ・実技はあまり差がなさそうだが、講義となると個人差が出てくると思う。
- ・日本で英語を使う意味がない。しかし世界を目指すなら別！
- ・英語で行う授業の講師は、海外の方のほうが良いです。
- ・ネイティブの講師で行う場合は、ある程度日本語ができた方がいいと思います。
- ・テクニカルワードなどを事前にくばっているとスムーズすすめられると思います。
- ・体育の授業というよりは英語の授業として捉えてしま

う気がしました。

- ・日本語と英語のニュアンスが微妙に違っている時など、伝え方や感じ方に差が出てくるかもしれない（良い意味でも悪い意味でも）。
- ・日本人が英語を話す形の方が、英語が話せない人がいた場合の対応はしやすいのではと思った。
- ・もし行うのなら、1対1の競技でなく、チームスポーツにした方が英語を使うことになると思います。
- ・留学生を交えて実技できるのなら、すごく楽しいと思う。
- ・英語のフォローがしっかりあればいいと思います。

IV. 考察

対象者の属性では、英語の専攻学生（教育学部英語コース、教育学部教育科学コース：英語、国際コミュニケーション学科）が15.6%、体育の専攻学生（教育学部保健体育・スポーツ科学コース、教育科学コース：体育）が5.0%を占めた。一方、英語と体育いずれの専攻とも関連が深い所属学部・学科の学生は79.4%であった。課外活動の実施状況については、50.2%の学生が体育会とスポーツ系サークル・同好会に所属していた。また、約半数の学生で英語に関する資格の有無が分かれ、公務員・教員・民間企業の順で進路希望が挙げられた。また、運動・スポーツと英語に関する有能感については、英語と比較して「非常に得意である」「少し得意である」と回答した学生の割合が極めて多い結果が示されており、37.6ポイントの差がみられた。

英語による体育実技の受講ニーズに着目すると、49.1%は「受講したい」「どちらかと言えば受講したい」と回答しており、約半数の学生が英語を導入した体育実技について肯定的な意見を持っていることがわかる。一方、講義では、受講を希望する学生は30.4%と全体の約3割を占め、実技と比較すると低い割合が示された。体育に自信があれば、その指導が英語であっても受け入れる傾向が高いと指摘した久保田・関田（2002）の知見は、英語と比較して体育の有能感が高い傾向がみられた本研究における対象者の特性を考慮すれば、類似する結果が得られたものと考えられる。また、大学生が身につけたい英語の分野（複数回答可）の調査では、回答が多かった順に、スピーキング（90.3%）リスニング（79.2%）、語彙（55.8%）、ライティング（49.1%）、文法（44.6%）、リーディング（44.2%）といった結果が示されている（古家・櫻井, 2014）。仲間と一緒に身体を動かす関係性の中で使用される英語は日常会話レベル程度であり、英語のスピーキング力を向上させる上で有効な学習機会ともなり得る。本学学生の英語に対する有能感や英語関連の資格取得率は高くないことから、英語学習の動機づけや学習の継続を促す上で、運動・スポーツや体育の授業を媒介とした CLIL は、英語学習におけ

る初期段階での機会提供が必要と考えられる。実技授業に関連する簡単な語彙や言い回し等を事前に予習するなど、CLIL 特有の授業における工夫が求められよう。

さらに、語学力の向上や科目に対する好意度とは別に、将来の進路に関連した回答が全体の 2 割から 3 割で得られ、特に講義ではその傾向が強くと示された。英語で実施する体育講義を受講することで、公務員・教員・民間企業を始めとする就職にも活用し得る内容が含まれることは、学生の希望にも合致していると推察される。語学力向上のためにカリキュラム改正を検討することは比較的容易であるが、一方で、高等教育機関としての専門性の高い教育からは程遠いものになってしまう問題点を八尋ら(2014) は指摘している。英語学習の導入段階として体育実技を活用する有用性は高く、さらに次のステップとして講義のカリキュラムや内容を多面的かつ中長期的な視点で議論する必要がある。

自由記述からは、肯定的・否定的意見を含めた多様な質問と意見及び感想が示された。授業担当者がネイティブか日本人のどちらになるか、あるいは、教材やレベルに関する疑問・意見等が挙げられた。学生の健康教育・実践に資する安全性の高いカリキュラムを構築する上で、ネイティブと日本人の連携による授業を試行する必要性が示唆される。英語力や運動・スポーツ活動水準が低い学生を想定したシラバス作成や教材の準備は学生のニーズを満たす上で重要と思われる。

本研究では、CLIL 導入の可能性に着目し、英語による体育授業の可能性について本学学生のニーズを明らかにしたが、ネイティブと日本人の連携やカリキュラム編成、CLIL 特有の指導法など課題は数多くある。実際に CLIL 試行期間を設けて効果を分析し、高等教育機関が提供する教育としての質を検証することも今後の課題と考えられる。

V. まとめ

本研究では、英語で実施される大学体育の実技と講義に着目して、学生の受講に関するニーズを明らかにすることを目的とした。共通教育科目の履修学生 362 名を対象とした質問紙調査の結果、以下の点が明らかになった。

- 1) 英語による体育授業について、実技では約半数の学生、講義では約 3 割の学生において肯定的な意見が示された。
- 2) 英語による体育授業が将来の進路に役立つと考える学生は、実技で約 2 割、講義で 3 割以上を占めており、実技よりも講義で多い傾向が明らかになった。
- 3) 授業担当者や教材、レベルに関する意見が挙げられ、シラバスや教材の事前準備に CLIL 特有の工夫が必要と考えられる。

英語による体育授業のニーズは、本学学生において一定の割合で示された。語学力の向上と共に、卒業後の進路を見据えた実践的な授業展開が学生に期待されている。体育授業は、学生の健康教育や健康づくり実践に寄与するだけでなく、英語学習における動機づけの初発機能としても有用性が高いと示唆される。

引用文献

- 1 CLIL Japan Primary (2017) 「What is CLIL? CLIL ってなに? - CLIL を理解するための 10 のポイント -」 CLIL in Japan for Primary Education ホームページ, <http://primary.clijapan.org/what-is-clil/> (2017 年 11 月 27 日参照)
- 2 池田真准・逸見シャンタル (2014) 「上智大学と CLIL CLIL 導入への軌跡と実践」 ChHIeru.Web Magazine ホームページ, <http://www.chieru-magazine.net/magazine/entry-6732.html> (2017 年 11 月 27 日参照)
- 3 古家聡・櫻井千佳子 (2014) 「英語に関する大学生の意識調査と英語コミュニケーション能力育成についての一考察」武蔵野大学教養教育リサーチセンター, 4, pp.29-50.
- 4 小林勝法・北徹朗・木内敦詞 (2014) 「英語で行う大学体育の授業に関する実態調査報告」大学体育, 104, pp.72-73.
- 5 久保田秀明・関田一彦 (2002) 「英語による体育実技指導に対する心理的抵抗に関する一考察」創価大学教育学部論集, 52, pp.71-77.
- 6 文部科学省 (2000) 「グローバル化時代に求められる高等教育の在り方について (答申)」平成 12 年 11 月 22 日大学審議会, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_daigaku_index/toushin/1315960.htm (2017 年 11 月 28 日参照)
- 7 中西千春 (2011) 「CLIL 型学習(内容言語統合型学習)とは何か What is CLIL (Content and Language Integrated Learning)?」国立音楽大学研究紀要, 46, pp.95-105.
- 8 二五義博・伊藤耕作 (2017) 「高専 1 年生に対する体育 CLIL の可能性: 英語を使用したサッカーの授業を事例として」大学英語教育学会中国・四国支部研究紀要, 14, pp.125-142.
- 9 八尋春海・デニス・ウールブライト・塚本美紀 (2014) 「大学生の英語学習における動機と企業の求める英語力」西南女学院大学紀要, 18, pp.201-206.